

湯澤規子著

『胃袋の近代』

——食と人びとの日常史』



評者：原山 浩介

はじめに

本書は標題が示すとおり、近代という時代をめぐり、「食」を切り口にしながら「日常史」を描き出すことを試みている。その意気込みは、序章において強く打ち出されている。すなわち、「近代という時代を行き交う雑踏のなかには実にさまざまな人びとがいて、誰もが時代の担い手であった。埃と喧騒にまみれたその雑踏の足跡は、果たして彼らの体温と体臭のなかで理解されてきただろうか。筆者はそうは思わない」という、いささか挑戦的な問いかけに始まっている。そして、「食をめぐるさまざまな事象や問題を論じることはすなわち、生きることを論じることにもなるだろう。「日々食べる」ということ。この当たりまえの身体感覚を手離さずに歴史を描くことを、本書では「日常史」の構築と意味づける」と、ねらいが記されている。

この言明は、非常に魅力的であり、かつ、いささか謎がかったもいる。

「食をめぐるさまざまな事象や問題を論じることはすなわち、生きることを論じること」という設定は、私にとっては、よくぞ明言してくれた、と思うところがある。これは、この言明が、歴史叙述における心構えとして魅力的だからというばかりではない。そもそも今日におい

て、「食」と「生きる」ということが、内在的な連動をもって思考され、論じられているのかということに対する疑問の表明でもあるからである。

この問題について、ここで立ち入った議論はできないが、煎じ詰めていえば、「食の安全」が行政施策として、あるいは科学性に依拠した「リスクコミュニケーション」のなかで扱われたり、国際間の貿易交渉における「関税」と日本の生産現場の問題が取り上げられたりする際、それらはいずれも「生きる」人の好み、思想、社会への態度、そしてもちろん命そのものに深く関わっているはずであるにもかかわらず、体温が感じられない抽象的な議論に切り詰められる傾向が強い。あとがきで、「胃袋が社会への経路としての意味を失いつつある」と記されているように、いわば「大人の議論」が、足元の「食べる」ということのリアリティと結び合うきっかけを取り逃がしたままであることを告発するのが、本書の隠されたねらいであると私は考えている。

その一方で、謎がかっているのは、そもそも「日常史」とは何か、という点である。序章では、「体温と体臭が感じられる世界、それこそが、まさに生きている人間の証であるといえるならば、本書ではそれを歴史として描きたい」とも述べられている。謎がかかるのは、ここでの「歴史」が果たして何を意味しているのかという部分である。こちらについては、本書の全体をみながら、後ほど改めて考えてみることにしたい。

まずは、以上を踏まえた上で、この「食」すなわち「生きる」ということが、どのように本書の叙述に反映されているのかを見ていくことにしたい。

本書の構成

本書は第1章から第7章までと、序章・終章

により構成されており、章の上位区分はないが、私の理解では、大きく3つのかたまりが存在している。著者の意図に反する可能性もあるが、ここでは便宜的に、それぞれ「第1部」～「第3部」と呼ぶことにする。

最初のかたまり（第1部）は、第1章「一膳飯屋と都市——胃袋からみる近代日本の都市問題」、第2章「食堂にみる人びとの関わり——食をめぐる政治と実践」、第3章「共同炊事と集団食のはじまり——工場の誕生と衣食住の再編」である。いずれも、都市と工場の「食べる」場がどのように形成され、変容を遂げたのかを、労働者や貧民を対象としながら叙述している。

2つめのかたまり（第2部）は、第4章「胃袋の増大と食の産業化——大量生産・大量加工時代の到来」、第5章「土と食卓のあいだ——食料生産の構造転換と農民・農家・農村」、第6章「台所が担う救済と経済——公設市場・中央卸売市場の整備」である。これらは、「食べる現場」から少し離れたところで食を支え、あるいは食を規定する、生産・流通を舞台とした叙述である。

そして、「第3部」は単独の章になるが、第7章「人びとと社会をつなぐ勝手口——市場経済が生んだ飽食と欠乏」が、「残食」を軸にしながら、「食べる現場」の出口を描きつつ、食をめぐる階層差とそこに介入する仕組みをめぐる叙述している。

このように、全体の流れは、食べるという現場に始まり、生産・流通に展開し、最後は残飯と階層差の議論へ向かうという筋書きになっている。そしてこの全体を通じて意識されているのは、労働者や貧民など、「庶民」とでも言い得るような人びとの存在であり、またそうした人びとの生活を支えるための、「救済」を含む社会的な仕組みや行政施策を意識した構成に

なっている。多様な資料を駆使しながらのこうした工夫が、本書全体をドラマチックな構成にしており、『胃袋の近代』という、「体温」を感じさせるタイトルを支えている。

さて、この全3部のうち、ここでは第1部と第2部の内容について、少し立ち入って考えてみたい。

「第1部」（第1章～第3章）のうち、最も紙幅が費やされているのは、第3章であり、本論全体の4分の1近くを占めている。ここでは、工場における食事の提供を独自の資料調査等に基づいて明らかにしつつ、「工場食」をはじめとする食事を中心に置きながら、女工の世界を描こうと試みている。そのなかで、『女工哀史』のモデルとなった細井和喜蔵の配偶者が記した「共食」の喜び、倉敷紡績における「飯場」請負から直営へという供食体制の変化、岸和田紡績における朝鮮人への食事の上での差別といった事例が示されていく。そして、叙述は工場にとどまらず、工業集積地における企業の組合による共同炊事、農村の共同炊事などに及び、食が集団的に提供されるようになる過程を示していく。

工場などでの供食、あるいは共同炊事を通じた「食の集団化」は、素朴に「胃袋の連帯」の可能性を持つと同時に、労働者の平等の確保と救済の実施という社会性を孕み、その一方で効率の良い労働力の再生産を目論むという政治・企業の功利的なねらいがある。また共同炊事は、戦時という文脈においても推奨される。この「共食」「連帯」のきわどさに注意を払いつつも、著者はやはり「連帯」の可能性に希望を託している。

前段となる第1章・第2章は、一膳飯屋や簡易食堂に焦点を当てつつ、都市の労働者の食風景を描いている。今和次郎などを引用しつつ、どこか、人びとの食卓をのぞき見るようなとこ

ろのあるこの2つの章は、第3章にみる食の集団化の議論の前条件となっており、全体として近代の労働者層を中心とした食の世界を示す形になっている。

「第2部」では、「食べる」ことの向こう側をひろっていくのだが、率直に興味深かったのは第4章の漬物、とりわけ沢庵と大根に焦点を当てた叙述である。労働者に供するための買い付けからは、近郊の農村・農家が都市の労働現場における需要に規定されて再編される過程を読み取ることができる。そして、この産業化とも呼ぶべき事態の進展に伴い、肥料となる糞尿が工場から農家に供給（販売）されていること、大根の輸送と漬物屋の増加へと叙述は展開し、最後に軍需の問題へと話は進んでいる。

続く第5章では生産する側の農村が産業化と市場の論理に規定されて変容していくことが手短かに触れられており、そして第6章では中央卸売市場の整備までが叙述されている。この第6章は、社会政策的な色合いを帯びていた公設市場から、資本主義の展開と都市の発展に照応する中央卸売市場への変容として描かれており、これが大量生産・大量消費を前提とした、農産物を中心とする食料品を位置づける根本的な体制の変化として描かれている。

この「第2部」は、農業・畜産業と流通の資本主義的再編を示しており、「第1部」の「食べる現場」の変容と「食の集団化」、およびそれらに対する社会政策的、あるいは功利的な「操りの糸」をめぐる叙述と対をなしている。そして、この「資本主義的」な構造変容を、単純な巻き取りの力として置くのではなく、その力関係のなかにある生産や生活の体温をくみ取ろうとする意図が見える。

「日常史」の面白さと課題

本書の真骨頂は、冒頭でも見たとおり、「食

べること」を論じることによって「生きること」を論じるというスタンスであり、しかもこれを近代という時代の「日常史」としてまとめようとしているところにある。この「日常史」は、魅力的でありながらも、やはり厄介な課題である。

かつて、私が、池上甲一、岩崎正弥、藤原辰史の3氏と共著で出版した『食の共同体——動員から連帯へ』（ナカニシヤ出版、2008年）の終章は、「胃袋の連帯」を目指して」というタイトルになっている。そこでは、「食の全体性を見通すと、結果的に現代社会の矛盾を鋭くえぐり出し、それをどう克服するのかという問題意識を育むことができる。だが食に関する思考はいとも簡単に、まったく別の政治性や経済原則に絡め取られてしまう」とまとめられている。本書は、その「結果的に」という部分を反転させ、むしろ「食べる」というところから全体を見通そうとしたのではないかと私は見ている。

そもそも、「歴史」を描くということのなかでは、それぞれの社会がどのような展開と変化を遂げたのかをめぐる、構造論的な視点が強く意識される。この営みはそれ自体としてたしかに重要なのだが、叙述のなかに人びとの日常をどれだけとどめているのかということは常に問われる。「問われる」というよりも、むしろ、叙述のなかで欠落する「日常」を、そうした構造的な把握のなかに呼び戻す方が常に探られているといった方が良いだろう。

例えば「労働」という課題は、その研究蓄積ゆえに、相対的には呼び戻しがしやすい領域である。それに対して「食べる」ことを呼び戻すという試みは、もちろん類例がないわけではないが、依然として少し難しい課題である。本書は、その課題に果敢に挑んだものであると評価できる。

しかし、だからこそ、もう一度、原点に立ち返って考えてみなければならないことがある。

それは、この「食べる」ことの議論と、構造論的な社会や時代の把握を結び合わせるための方法である。「日常史」というフレーズは、それ自体として魅力的なのだが、これが「歴史」という叙述の方法とどのように結びつくのかが問われねばならず、それは、そもそも「日常史」と「歴史」の「史」は果たして同じ意味合いなのかという問題にもなる。この点が、冒頭で「謎がかかっている」と書いた点である。

端的にいえば、本書で取り上げられている事柄が、近代という時代に生じた「食べる」ことにまつわる事例研究にとどまるのか、それとも近代という時代を象徴的に取り上げているということなのか、その評価が大変に難しい。おそらく、著者の立ち位置は後者なのだろうと思われるのだが、それを成り立たせるためには、バックグラウンドになる近代史と結び合うポイントがもう少し明示的に示されている必要がある。

なにも、研究史を精密に検証せよ、叙述がもっと構造論的になさなければならない、というようなつまらない指摘をしようというのではない。本書で取り上げている事柄から、近代という時代を見通すことができるというような、設定と文体の問題である。そしてこの問題は、似たような仕事をしたと考える私自身に

も返ってくる（それゆえ実はあまり書きたくない）、重いものでもある。

本書の面白さを損なわない形で、「歴史」と「日常史」を結び合わせる事がどのように可能なか。本書のなかでは、さまざまなレベルでの「食の集団化」を軸にしながら、これに随伴する生産・流通の再編と、そのなかを生きた人びとのありようを描き出し、同時に「食べる現場」の世界をも多様に示している。その限りでは、内容においては一定の成功を収めているといえるだろう。ただ、こうした方向での書き方には、繰り返しになるが、そこから時代全体を見通すために、クリアせねばならない設定と文体上の課題が、やはりつきまとう。その先へと到達するにはどうしたらよいのかを、著者へのないものねだりの批判として預けきってしまうのではなく、私自身に返ってくることを甘受しながら、今後も考えていくべき課題としてあえて指摘しておきたい。

（湯澤規子著『胃袋の近代——食と人びとの日常史』名古屋大学出版会、2018年6月、v+325+18頁、定価3,600円+税）

（はらやま・こうすけ 国立歴史民俗博物館研究部准教授）